私の履歴書

武雄 椎名 ④

終戦の日

開戦から四カ月後の一九四二年（昭和一七年）四月、岐阜から上京し、慶応義塾普通部に入学した。父も普通部に通っており、当たり前のように進学先に選んだ。

父に連れられて何度も東京していたので、東京生活にさほど違和感はなかった。洗足に父や祖母など家族で引っ越し、三田綱町の学校に通った。

普通部には当時、四十五人のクラスが五つあった。A、B、C組の生徒は慶応幼稚舎からのエスカレーター組が大半で、D、E組は普通部からの入学組だった。私はA組。同級生に幼稚舎から通ってきた鈴木忠雄メルシャン社長がいた。D組には私国枝、外から来た田中順一郎・三井不動産会長がいた。

中学二年生の途中までは詰め襟に半ズボン。近くの中学生から「慶応の半ペンツ」とからかわれた。それが次第にカーキ色の教練服を着ることが増えていった。

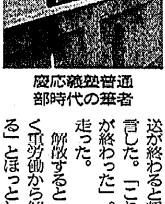
話は少々破廉恥とされるが、このころ、日本IBMの前身の日本ワットソン統計会計機械には逆風が吹き付けていた。日米開戦にあり「敵国資産会社」の指定を受け、設立からわずか五年の一九四二年に、日本政府に全資産を凍結されたのだ。IBMには、海外法人は「100%出資し、東京・恵比寿や渋谷の貨物駅に溜まった薬の原料をトラックで運び入れ、倉庫に運び込むという力仕事を来る日も来る日もやらされた。戦争が激しくなると防空ごうを掘る作業にも従事した。四五年五月の空襲で普通部の校舎は焼失。洗足の家も焼けた。家族は岐阜に戻り、私は恵比寿にある遠縁の家に世話になった。

衝撃・解放感が相半ば

裸電球のまぶしさ印象的

この間には戦争がある。戦後、資産の返還を受けた日本ワットソンは、この資産を資本金として事業を再開。五〇年に日本インターナショナル・ビジネス・マシーンズと改称し、急成長していく。この過程で、資本金を拡充していくが、増資に投じた約十三百五十億円は、すべて内部留保、すなわち日本で稼いだ利益で賄った。外資と言いながら、日本IBMには戦後一度もドルが払い込まれていないのである。

話を戻そう。中学三年の夏から我々のクラスは、東京・駒沢にある海軍兵器工場の勤労動員に駆り出された。授業は一切なし。東京・恵比寿や渋谷の貨物駅に溜まった薬の原料をトラックで運び入れ、倉庫に運び込むという力仕事を来る日も来る日もやらされた。戦争が激しくなると防空ごうを掘る作業にも従事した。四五年五月の空襲で普通部の校舎は焼失。洗足の家も焼けた。家族は岐阜に戻り、私は恵比寿にある遠縁の家に世話になった。



慶応義塾普通部時代の筆者

四五年八月十五日。その数日前から薬品工場で防空ごうを掘られていた。何でも広島に新型爆弾が落ち、それに耐えられる深い防空ごうが必要ということだった。汗まみれで穴を掘っていると、米軍機がやって来て空からビラをまいていく。一枚拾い、憲兵に隠れて読むと「日本政府はポツダム宣言を受諾しました。無条件降伏です」と日本語で書いてあった。

当時の私はいっぱしの軍国少年だった。「特攻隊になる」と勇ましいことを言っていたらしい。米軍のビラに怒りを覚えていたが、十五日に突然、将校が「大事な放送がある」と言って、我々を広場に並ばせた。炎天下に上半身裸で聞いていたが、雑音でよく聞こえない。放送が終わると将校が宣言した。「これで戦争が終わった」。衝撃が走った。

解散すると「ようやく労働から解放される」とほっとした。夜になって自宅に戻ると、灯火管制の必要もなくなったので、電灯にかぶせていた傘をはずした。裸電球のまぶしさが目にしみる。「世の中はこんなに明るかったんだ」。十六歳の胸に終戦がひしひしと迫ってきた。八年後に「敵国の会社で働くことになるなど」夢にも思っていなかった。

（日本IBM最高顧問）